大日川について

大日川は、石川県と福井県の県境にある大日山を源流とし、小松市や白山市の山間部を抜け、急流で有名な手取川と合流する流路延長34.9kmの川である。

川の中・下流域はアユ釣りが有名で、その味は県下一といわれている。一方、当会が活動を行う大日川ダム上流端から 25km の上流区間は、ヤマメ・イワナが棲む渓流域となっている。

大日川上流区間の現状

当会が活動を行う大日川上流域は、高低差が標高300～600mと急流で、小松市の山深い流域にあるものの、渓流釣りを楽しむ遊漁者が年間200名程訪れる魅力ある川である。

近年、上流域で山林が荒廃している。また、急流のため砂防堰堤も多く整備されている。加えて、雪解けや豪雨の頻発化によって道路等の改修がよく行われ、これらの影響で河床に砂が多く堆積するようになった。

河床への砂の堆積は、浮き石の減少を招いた。浮き石の減少は、かつて数多く分布していた「カジカ」の棲息場・産卵場の消失につながった。カジカは、漁業権魚種ではないが、流域の集落住民にとって身近な魚で、夏の風物素麺のつゆ出汁をとる欠かせない食材でもあることから、多くの住民がその資源回復を望んでいる。

また、最近、山林に数多くあるナラの木が枯れ、それが流木となって川に多く堆積するようになった。川に堆積した流木は、河川の流れを遮断し、それが原因で川が氾濫し、大きな災害を招く恐れがある。事実、令和４年８月豪雨の影響で、流木等が橋などと衝突し施設が損傷を受けており、その対策が喫緊の課題となっている。

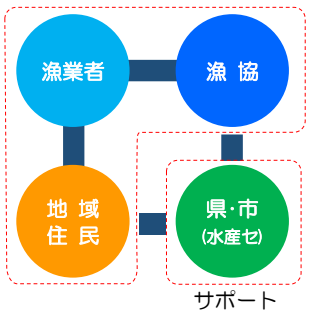
組織の設立と活動の目的・方針

活動区域の流域には３つの集落がある。これら集落では、かつて養蚕や炭焼きが盛んに営まれてきた。しかし、社会の変容とともにこれら産業は衰退し、現在、これら３つの集落に住民票をおく世帯はいない。

そのため、大日川上流を管理する新丸漁業協同組合の職員や組合員は、移り住んだ近隣の市街地から車で通い、組合の活動を実施している。また、組合員以外の集落住民も、里山の管理など車で通い行っており、里山・里川の管理がいき届かなくなっている。

こうした背景から、上記課題の中、新たな体制づくりが求められ、新丸「大日川流域」を守る会を平成25年度に設立した。体制は、漁業者・漁協だけでなく、元集落住民にも参加を呼びかけ構成した。また、技術的な支援を得るために、カジカの種苗生産や水生生物調査を行っている石川県の内水面水産センターに協力を仰ぎ、活動を進めることにした。

活動組織



活動方針

○ 里川の環境の保全・管理

河道内に堆積する流木、またその河川沿いの道路等におけるゴミを除去し、流域環境の保全･管理を図る。

○身近な魚「カジカ」の資源回復

浮き石の減少により数を減らしたカジカの種苗を放流し、本種の資源を回復し、元住民の集落への愛着をつなぎとめ、後世につなぐ。

保全活動を通じて集落の絆をつなぐ

（1）里川の環境の保全･管理

災害対策等を目的に、河道内に堆積する流木、また川沿いの道路等のゴミを除去する取組を行う。

除去活動は、積雪する冬季を除いた時期に年３回実施。また、流木等の堆積状況の確認を５～10月の期間中、毎月１回行う。活動の範囲は10kmほどで、河道内の流木除去班と、道路沿いのゴミ拾い班に分かれ、作業を行う。なお、構成員の全てが集落外に暮らしていることから、活動は、原則、日曜日に行っている。

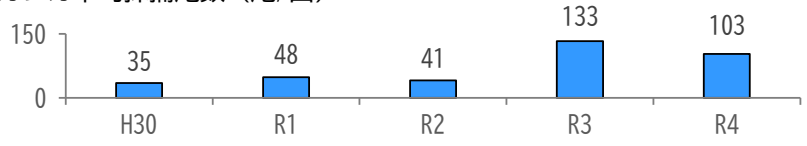
（2）身近な魚「カジカ」の資源回復

カジカ（漁業権魚種外）の資源回復は、種苗放流により行う。

種苗は、県の内水面水産センターから購入し、毎年4,000尾前後放流する。放流時期は７月。また、内水面水産センターの協力のもと、種苗放流前、放流１週間後、１ヶ月後、２ヶ月後、３ヶ月後を原則に、モニタリング調査を実施し、効果を検証する。

活動の効果と今後の課題

流木は、雪解け水や洪水時等に山から流れ出てくるため、毎年一定量の堆積がみられる。ただし、定期的な除去活動により、積物の蓄積は抑制できており、里川の環境や景観の維持につながっていると評価できる。また、カジカについては、モニタリングで採捕した平均尾数がここ２ヶ年100尾/回を超えており、一定の資源量が維持できている。

定期的に行う保全活動は、集落の元住民の貴重な交流機会である。今後も継続的に取組を行い、活動を通じて元住民の絆の維持を図りながら、里山･里川の管理ができればと考える。

カジカ平均採捕尾数（尾/回）